

巻頭言

学長 戸田洋樹

今回の研究紀要は、駒澤学園八十周年記念号と銘うって刊行される。一九二七年に駒澤高等女学院が道元禅師の教えを建学の精神として創設されて以来、八十年経ったわけである。キャンパスIT化、奨学金制度の設置、寺院資料研究センターの開設等の八十年記念事業も着々とその成果をあげている。

一九九三年四月に開設した駒沢女子大学人文学部は、十五年目を終えようとしている。本研究紀要は、開設の翌年が創刊号である。したがって、この記念号で十四号を数えることになる。その間、開設時の日本文化学科、国際文化学科の二学科に加えて、人間関係学科、空間造形学科、映像コミュニケーション学科が設置された。仏教文化専攻と臨床心理学専攻の二専攻を擁する大学院も加わり、研究環境は広がると同時に深まったはずである。

研究紀要に掲載されている論文を高くは評価しない向きもあるようだが、研究紀要には少なからぬメリットがある。その最たるものは、学会誌と比して、字数制限あるいは枚数制限に関して、比較的緩やかなことである。掲載論文が舌足らずの論文になることは稀である。さらに言えば、論文を読む同僚、特に専門分野の異なる同僚には、居ながらにして、内容の理解はともかく、仲間が今どのような研究をしているかを知ることができる。その他、種々のメリットをあげることができるが、しかし、杞憂であろうが、紀要論文だからといって手抜きはしてほしくない。

われわれは教育に携わりながら研究活動を行っている。教育の内容と研究の内容とが必ずしも同一ではない。しかも、公務に時間を取られ、研究が中断されることもある。今回の執筆者は、そのような中でも、高度な学術論文として評価される論文を投稿しているはずである。そして、実際に、この八十周年記念号が力作ぞろいの論文集となっていることを期待している。